

第9章-3 17~18世紀ヨーロッパの文化

バロック時代の風潮

「死を忘れるな Memento Mori」→「生を楽しめ」「人生は一幕の演劇」
→シェークスピアに始まる演劇の興隆→古典主義文学、バロック=オペラ

<美術>……王侯の宮廷中心 (←それ以前は教会中心)

◎ バロック 様式……17世紀 (Baroque、ポルトガル語で「いびつな真珠」の意味)
曲線の入り組んだ不規則な装飾、流動感、明暗のコントラスト etc.

絵画 { フランドル…… ルーベンス (1577-1640) 『マリ・ド・メディシスの生涯』
ファン・ダイク (1599-1641)
スペイン …… エル・グレコ (1541-1614、ギリシア・クレタ島出身)
ベラスケス (1599-1660) 『女官たち』
オランダ …… レンブラント (1606-69) 『夜警』

建築 ヴェルサイユ 宮殿 (フランス王 ルイ14世)

◎ ロココ 様式……18世紀 (Rococo、“石”の意味、石や貝殻で洞穴の周囲を飾ったことから)
洗練された繊細な美、軽妙優雅な装飾性

絵画 ワトー (仏、1684-1750) 『シテール島への巡礼』

建築 サン・スーシ 宮殿 (Sanssouci = フランス語で「憂い無し」の意味)
ベルリン近郊ポツダム、プロイセン王 フリードリヒ2世

※シノワズリ (中国趣味) ……17世紀後半から19世紀初めにかけての中国趣味のこと
サンスーシ宮殿にも「中国館」がある

<音楽>……バロック音楽

- ・宮廷劇場におけるオペラの始まり
- ・コーヒーハウスなどでの器楽合奏

ドイツ…… バッハ (1685-1750)、ヘンデル (1685-1759)

<文学>

◎ 古典主義 文学

フランス……リシュリュー創設のフランス^{アカデミー}学士院によるフランス語の統一・洗練
→18世紀啓蒙主義時代ヨーロッパの国際語に

悲劇作家…… コルネイユ (1606-84)、ラシーヌ (1639-99)

喜劇作家…… モリエール (1622-73)

↓

のちドイツで大成 (→p.237) …… ゲーテ (1749-1832)、シラー (1759-1805)

◎イギリス・ピューリタン文学

ミルトン (1608-74) 『失楽園 (Paradise Lost)』

クロムウェルの外交秘書、激務で失明、王政復古で逮捕、処刑はまぬがれ当書を口述筆記

バンヤン (1628-88) 『天路歷程 (The Pilgrim's Progress)』

王政復古後に非国教徒の集会で説教したため 60-72 投獄、75 再投獄半年、当書を獄中執筆

◎イギリス海洋文学

デフォー (1660-1731) 『ロビンソン・クルーソー』 = 社会・経済史の資料

スウィフト (1667-1745) 『ガリヴァー旅行記』 = 政治・社会風刺

<自然科学>

ルネサンス時代・・・コペルニクス、ガリレイ、ケプラー



ニュートン (1642-1727、イギリス、1696-造幣局長、1703-王立協会会長)

3大発見・・・光の分解、万有引力の法則、微積分法

Philosophiae naturalis principia mathematica

1687『プリンキピア (自然哲学の数学的原理)』＝古典物理学確立

リンネ (スウェーデン、1707-78)・・・植物分類学、生物の学名を命名

ラヴォアジエ (仏、1743-94)・・・質量保存の法則、大革命で徴税請負人の前歴により処刑

ジェンナー (英、1749-1823)・・・種痘法

ラプラス (仏、1749-1827、ナポレオン政府で内相・伯爵、復古王政で貴族院議員・侯爵)
ガス状の物質から星が生成 (初めカントが唱えラプラスが基礎づける)

カント＝ラプラス説

<哲学>

◎イギリス 経験論 哲学

フランシス・ベーコン (1561-1626)

1613 検事総長、16 枢密顧問官、17 国璽尚書、18 大法官、21 汚職で訴追

1620『ノヴム・オルガヌム (新機関、Novum Organum)』

帰納法・・・経験から一般法則を導き出す考え方

ホッブズ (1588-1679)・・・実在するのは物体とその運動のみ。

普遍的実在などというものはない＝唯名論

自然現象だけでなく心的現象も物体の機械的運動による。

外的物体が感覚→記憶となり、知識の源泉となる。

ロック (1632-1704)・・・人間の生得観念を否定。

生まれたときの心は「白紙 (タブラ・ラサ)」。

白紙の人間が観念を持つのは、全て「経験から」である。

ヒューム (1711-76)・・・懐疑論 (不可知論)

経験論を徹底すると、事物間の因果関係は必然ではない。

(経験をいくら重ねても、法則そのものは経験できないから)

◎大陸 合理論 哲学

デカルト (仏、1596-1650、49 スウェーデン女王に招かれるが滞在半年で肺炎で死去)

1637『方法序説』

方法的懐疑→第1原理「Cogito, ergo sum (我思う故に我在り)」

演繹法・・・原則をもとに数学的な証明の手続きで個々の事象を論証

スピノザ (蘭、1632-77)

ユダヤ商人の子、56 家業破産で廃業し、信仰も捨てユダヤ教会から破門

汎神論・・・唯一無限なる存在＝神＝自然そのもの、と考える

ライプニッツ (独、1646-1716)

数学者・・・ニュートンとは別個に微積分法考案 (現在微積分で使用する記号を導入)

物質の最小単位＝「モナド (单子)」

モナドは変化せず、その組み合わせが変わるだけ (現在の原子論の基)

唯一絶対の完全者である神以外のモナドは、全て神によって作られる

◎モラリスト

モンテーニュ『随想録 (エッセー)』(→ルネサンスの項、p.175)

パスカル (仏、1623-62)

1639 円錐曲線理論、42 計算機、48 液体の圧力に関するパスカルの原理、54 修道院客員

遺稿『パンセ』・・・人間は考える葦である

◎ **ドイツ観念論** 哲学…イギリス経験論と大陸合理論の統合

カント (独、1724-1804)

- 『**純粋理性批判**』…科学的認識能力の分析 →コペルニクスの転回
理性には経験を認識する「時間・空間・因果律」という枠組が内在する。
知識とは単に経験を白紙に書き込んだものではない (⇔ヒュームの懐疑論)
- 『**実践理性批判**』…道徳的理性の分析
理性には人類に普遍的な道徳法則＝「道徳律」が内在する。
この内面からの命令に従うことが真の自由である。
- 『**判断力批判**』…自然と道徳とを「美」と「合目的性」で統合する「反省的判断力」

また

『**永久平和のために**』(1795)…国際的平和機関の提唱

<政治思想>

◎ **自然法** 思想…人間の共同生活を貫く普遍的法

グロティウス (蘭、1583-1645) = “国際法の父”

『**戦争と平和の法**』…国際法・海洋法の必要性を説く

◎ **社会契約説** …社会や国家の形成を人民の契約関係で説明

ホッブズ (英、1588-1679) …『**リヴァイアサン**』

「万人は万人に対して狼である」＝人間の自然状態

→この状態を避けるために個人はその自然権を統治者に譲渡

→よって人民は君主に服従しなくてはならない

→結果的に、王政復古後の絶対王政を擁護

ロック (英、1632-1704) …『**統治論二篇** (市民政府二論)』

個人は契約によって自然権を統治者に委ねたが、

統治者が人権を侵害 (=契約違反) する場合には、その契約を破棄できる

→**抵抗権 (革命権)** …名誉革命を理論的に擁護、アメリカ独立宣言などに影響

< **啓蒙思想** (enlightenment) >

全ての伝統的偏見・不合理な制度を、理性によって批判

→フランスで開花し全ヨーロッパに広がる

(ドイツ・ロシアなどでは啓蒙専制君主による“上からの近代化”)

モンテスキュー (仏、1689-1755)

1748 『**法的精神**』…三権分立を説く

ヴォルテール (仏、1694--1778)

1717-18 バスティーユに投獄 (政治批判パンフレットの著者と疑われる)

1731 『**哲学書簡** (イギリス便り)』

イギリス議会政治礼賛＝フランスの旧制度批判

キリスト教批判 (聖書は原始文明の産物、教義は争いと分裂の原因)

1750-53 プロイセンのフリードリヒ2世に招かれサンソーシ宮殿滞在

晩年、「フェルネー (スイス国境付近) の長老」…当代最高の文化人と称される

ルソー (仏、1712-78、ジュネーヴ生)

文明の進歩こそ不幸の原因…「自然に帰れ」

→この点で他の啓蒙思想家と大きく異なる

1755 『**人間不平等起源論**』

平等な原始社会→私有財産制・文明社会の中で不平等が発生・進行

1762 『**社会契約論**』

人民が十分な情報を持ち、直接民主制で党派を組まずに議論し、

公共的利益をめざす「一般意志」を形成→人民主権の国家。

1762 『**エミール**』…教育論的エッセー

従来の教育は社会的不平等への適応のためのもの

→社会の悪影響を避け、子どもが元来持つ自然の善性を守り育てる

※オペラも作曲 (「結んで開いて」の旋律)、百科全書でも音楽の項目を執筆

※『百科全書 (Encyclopedie)』……1751-72、本文 17 巻、図版 11 巻

単なる辞書を超えた思想史的意義

国王の専制政治と、教会の愚民化政策を、理性の力で覆すために
合理的・実証的な知識体系の普及をめざす



百科全書派 (アンシクロペディスト、Encyclopedistes)

ディドロ (仏、1713-84)、ダランベール (仏、1717-83)

ヴォルテール、モンテスキュー、ケネー、テュルゴーらも協力したが
主には若手の学者たちが執筆 (現在の百科事典も同じ)

<経済思想>

◎ 重農主義 ……重商主義政策を自然法思想から批判 (physiocracy = 自然の支配)

標語「レッセ・フェール (laissez faire、為すにまかせよ)」

ケネー (仏、1694-1774)

ルイ15世寵妃ポンパドゥール夫人の侍医、貴族に列せられ、のち経済学へ

『経済表』

資本主義の循環過程と再生産過程を説明 (「天才の書物」=マルクスの批評)

国富の増大には農業生産発展が不可欠であり、
そのためには「自然権の所有者である農民」を
「自由放任」で活動させるべき。

テュルゴー (仏、1727-81、名門貴族、父はパリ市長)

1761-74 州知事として、賦役廃止・税制改革・商業の自由・
救貧制度の確立・農業改革などの近代化推進

1774 ルイ16世により、財務長官任命

ギルド廃止・国内関税廃止を実現

1776 特権階級の反対で辞職

◎古典派経済学……イギリスでは18世紀後半に産業革命に到達

資本主義経済の原則である自由放任主義の経済学発生

アダム・スミス (英、1723-90)

1776

『諸国民の富 (国富論)』

(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)

「労働」こそが富の源泉である (労働価値説)。

「分業」と「各人の利己心に基づく自由競争」が生産力発展の要因。



各人の行動は「神の見えざる手 (Invisible Hand)」により調節される。



マルサス (1766-1834)、リカード (1772-1823) により確立